

——open/shut の概念構造——

はじめに

(1) a. She is at school.

b. This watch is expensive.

さて、このように物理的位置と抽象の状態が根本的には同じ概念構造のスキーマに還元されるとしても、英語という言語においては、多くの場合、物理的な場所は *at* や *in* などの前置詞で標示され、他方、抽象的な状態は形容詞で

表されるという違いが見られる。物理的な場所は静止位置だけでなく、そこへの移動 (Goal) やそこからの移動 (Source) にも対応するから、そのような動きの違いを独立の前置詞で表現することが必要となるが、形容詞は、その本来的な状態性のゆえに、位置的な概念 (AT) をそれ自体に内包していると考えられる。その結果、一般に、形容詞の前に前置詞を置くことはできないし、また、at school のような場所表現を 1 語の形容詞で置き換えることも普通できない。物理的な位置が 1 語の形容詞 (ないし副詞) で表される例としては、away(←on way), asleep(←in sleep), aside(←on side) などが即座に思い浮かぶが、この接頭辞 a-は歴史的には on や in が文法化したものと考えられるから、これらも基本的には前置詞句として分類できる。

しかしそれでもなお、形容詞が位置関係を表すという場合が幾つか観察される。小論では、そのような例として open/shut を取り上げる。open/shut は「開かれた状態、閉じられた状態」という状態の意味として捉えるのが普通だろう。小西 (編) (1989: open の項) も、open の中核的な意味を「仕切りやおおいによって閉じられていないために人や物が出入りできる状態」としている。しかしむしろ、open/shut は扉や蓋の位置関係を述べるのが原型であり、状态的な意味はそこからの派生ではないかと思われる。以下では、これまで見過ごされがちだった open/shut の位置的な意味に焦点を当て、概念構造の観点から論じていく。

1. Goldberg の一義的経路の制約

本論に入る前に、Goldberg (1995: 82) の一義的経路の制約について理解しておかねばならない。

(2) 一義的経路の制約 (The Unique Path Constraint)

X が具体物の場合、単文内で X を 2 つ以上の異なる経路 (path) について叙述することはできない。単一の経路 (a single path) という概念は次の 2 つの場合を規定している：

- (a) X は特定の時点において 2 つの別々の位置に移動するようには叙述できない。
- (b) 移動は単一の情景 (landscape) の中で 1 つの経路を辿らなければならない。

この制約は、主として、(3 a) のような結果構文 (resultative construction) および (3 c) のような使役移動構文 (caused motion construction) の適格性を説明しようとするものである。

- (3) a. He wiped the table {dry/clean}. { } 内はいずれか 1 つを選択。
 b. *He wiped the table dry clean.
 c. Shirley sailed {into the kitchen/into the garden}.
 d. *Shirley sailed into the kitchen into the garden. (Goldberg 1995: 82)

結果構文 (3 a) における結果述語 (dry, clean) と使役移動構文 (3 c) における着点 (into the kitchen, into the garden) は、文全体が表す事態をアスペクト的に限定する働きを持つ。そのようなアスペクト限定表現は 1 つの文には 1 つに限られ、(3 b), (3 d) のように複数の限定表現を並べることは不可能である。(2 a) の条件は、Tenny (1994) などの研究で既によく知られているアスペクト限定の制限を「経路」という概念で言い換えたものと考えられる。

本稿との関わりで、より重要なのは (2 b) である。この条件が意図しているのは、世の中の事態を物理的な位置変化と抽象的な状態変化に区別した場合、1 つの文が表すことができるのは、物理的变化だけか抽象的变化だけかであって、両者を混在させることはできない、ということである。Goldberg の挙げる例文で説明しよう。

- (4) Sam tickled Chris {off her chair/silly}.

tickle 「くすぐる」というのは、相手に対する物理的な接触を表すだけで、その結果、相手がどのように変化するかは含意しない。そのため、働きかけの結果として生じる目的語の変化を前置詞句ないし結果述語の形で付け加えること

ができる。(4) では, tickle 自体が位置変化も状態変化も含意しないから, それに続く表現は位置 (off her chair) でも状態 (silly) でも可能である。これに対して, (5) のように位置と状態の両方を表現しようとする, (2 a) だけでなく (2 b) にも抵触するため, 完全に非文法的になる。

- (5) *Sam tickled Chris {silly off her chair/off her chair silly}. (Goldberg 1995: 82)

影山 (1996) では, 一義的経路の制約が意図している効果が語彙概念構造の図式から自動的に導き出されることを論じた。

- (6) [BECOME [[] BE AT-[_{Place/Property}]]]

冒頭で触れたように, AT-[] の位置には場所概念 (Place) か属性 (Property) のいずれか一方が入る。be 動詞の場合は AT~の部分で Place (1 a) でも Property (1 b) でもよいが, ほとんどの動詞はそのいずれか一方を指定している。たとえば become という動詞は He became rich. とか He became a doctor. のように Property を表現し, *He became (at) school. のように位置を表現することはできない。逆に, arrive という動詞は He arrived at his destination. のように Place を指定するから, (7) のような例で「彼は目的地にたどり着いた結果, ヘトヘトになった」という結果述語の意味合いを表すことができない (影山 1996)。

- (7) a. *The traveller arrived **breathless** (at his destination).

- b. *The athlete ran **tired**. (描写述語 (depictive) としての解釈なら可能)

(6) の概念構造において, AT-[] のスロットは1つしか設定されておらず, arrive はその位置に his destination のような場所名詞を指定するから, 結果状態を表す breathless は排除されてしまうのである。このように, Goldberg の一義的経路の制約が意図する2つの条件 (2 a, b) は, 概念構造型理論においては (6) のスキーマだけで処理することができる。

2. open/shut における状態と位置

以上の理論的背景を踏まえて、形容詞 **open/shut** の検討に移ることにしよう。結果述語としての **open/shut** の使われ方を、主動詞の意味によって整理してみよう。まず、動詞自体が状態変化を意味する例を挙げる。

- (8) a. The minister **tore** the envelop open eagerly. (A. Christie, *The Kidnapped Prime Minister*)
 b. My head's been **cut** open. (M. Spark, *Voices at Play*)
 c. A crew chief in a white jumpsuit **ripped** open a crate of canned Cokes. (S. Spielberg, *Close Encounters of the Third Kind*)
 d. I **spread** it [a telegram] open and read it. (E. Hemingway, *The Sun Also Rises*)

他に、**break open**, **split open** などがある。これらの例文で用いられている動詞は「やぶる、切る、裂く、広げる」ということを表すから、それ自体で「対象物が一体性を失う」という概念を含んでいる。目的語である封筒や箱が一体性を失うと、いわゆる「開いた状態、広げた状態」になり、それを **open** と描写している。

影山 (1996) では、結果構文をそこに生起する動詞の種類によって区分し、本来的に状態変化を意味する動詞について結果述語を補足するのが、その基本的な姿であることを指摘した。たとえば、**freeze** は液体が固体に変わることを、**break** は物体が一体性を失って粉々の状態に変わることを意味するから、*The lake froze solid.* や *The vase broke into small pieces.* の下線部のように、その「固体状態」「破片状態」を具体的な結果述語で描写することができる。(8) で用いられている **open** も、これと同じタイプの結果述語であり、本来的に状態変化を表す動詞の意味を詳しく描写する役目を果たしている。したがって、(8) のような例は、**open** が持つ状態性の意味の点でも、結果構文の成り立ちという点でも、ごく自然な文であり、なんら問題を引き起こ

さない。

ところが、主動詞が状態変化の意味を固有に持たないような場合には、慎重な検討が必要になる。影山（1996）および影山・由本（1997：第3章）では、**knock, shake, push, pull, kick, squeeze, wipe**などの動詞の基本的意味を「対象物に対する働きかけ（ x ACT ON y ）」として捉えた。しかし実際には、これらの動詞の多くは、その働きかけによって生じる目的語の変化結果まで表すことができる。たとえば、**kick, knock, shake**などの後には状態を表す結果述語でも移動の着点でも続けることができる。

(9) a. He kicked an empty can **into** the river.

a'. She kicked him **awake**.

b. She knocked all the pins **down**.

b'. The blow knocked him **senseless**.

c. She shook the crumbs **from** the tablecloth.

c'. The dog shook itself **dry**.

（例はいずれも市川（編）1995）

kick, knock, shakeは、前掲（4）の **tickle** と同じく ACT ON を意味するだけであるから、それに続く変化は位置変化でも状態変化でもよい。筆者の前掲書では、このことを説明するために、英語では概念構造において働きかけを表す上位事象（ x ACT ON y ）と、位置変化ないし状態変化を表す下位事象（BE-COME [y BE AT- z]）が合成され、全体として単一の事態を表すようになる と仮定した。その際、働きかけの後ろに付け加えられる下位事象は、基本的には、物理的な位置変化であっても抽象的な状態変化であっても構わない。したがって、次の例だけでは **open/shut** が状態なのか位置なのかを即座に決めることはできない。

(10) a. They jokingly **kicked** the door back **shut** with the trained feet of soccer players. (Mikhail Iossel “Bologoye”)

b. In crocuses the seed capsules sit there. . . ready to be **knocked open** by passing feet.

- c. The customers **shook open** a paper bag as gently as peeling a peach. (b と c の例は COBUILD Bank of English)

ところが、働きかけ動詞のグループの中でも、合成される下位事象に制限を付け加えるなものが観察される。たとえば、**push** や **thrust** は対象物に力を加えて押すことを意味するが、押された対象に変化が起こるとすると、それは位置の変化（移動）である。このことから、影山・由本（1997: 166）では、**He pushed rocks into the hole.** という例を（11）のように分析した。

- (11) $[[\]_x \text{ ACT ON } [\]_y \text{ CAUSE } [[[\]_y \text{ MOVE}] \text{ and } \text{He pushed} \text{ [BECOME } [[\]_y \text{ BE AT-IN-}[_{\text{Place}} \]_z]]]$
 $\downarrow \qquad \qquad \qquad \downarrow$
rocks **into the hole**

この場合、AT のあとの変項は **Place** として指定されているものと考えられる。なぜなら **push** の後に続く前置詞句ないし副詞（不変化詞）は通常、場所的なものに限られるからである（12）。

- (12) a. A victory by this method is called *tsuki-dashi* (literally, “thrust out”) if the loser is **pushed outside** the ring. (Walter Long, *Sumo*)
 b. He may simply sidestep the charge, turn and **push** his off-balance opponent **down**. (*Sumo*)
 (13) a. *The wrestler pushed/thrusted his opponent unconscious.
 b. The wrestler knocked his opponent unconscious.

たとえば相撲の押しや突きで相手が気絶しても、（13 a）のように **unconscious** という結果述語で表現することはできない。これと対照的に、**knock**（13 b）なら状態変化を表すことができる。この違いは、**knock** と **push/thrust** の表す現実の事態のありかたと深く関わっている。**knock... unconscious** というのは、なぐった瞬間に相手が意識を失うのであるが、**push, thrust** が表す事態は、押された／突かれた相手がまず動く（よろけたり、ふっ飛んだりする）のであって、押された瞬間的に気絶するとは認識されない。このことを概念構

造で公式化すれば, *push*, *thrust* は合成される下位事象として物理的な移動を指定する, ということになる。

下位事象を物理的な移動に限定するという点は, *throw* や *fling* などで一層明瞭になる。

(14) a. He threw the magazine {aside/away/down/out}.

b. *He threw the glass to pieces.

*The wrestler threw his opponent unconscious.

(15) a. A rikishi hoists his rival up over his stomach and flings him out. (Walter Long, *Sumo*)

b. *She flung the watch broken.

*The wrestler flung his opponent unconscious.

(14 a) (15 a) に対して, (14 b) (15 b) は不適格だろう。意味的に近い動詞に *dash* があるが, これは「勢いよく投げる」だけでなく, 投げられたものが「壊れる」ことまで意味するから, *She dashed the mirror to pieces.* が成り立つ。

これまで挙げた例は, 我々の概念構造の理論でも, *Goldberg* の一義的経路の制約でも, 正しく説明することができる。しかしながら, 次例の *force* という動詞は, *Goldberg* の制約では説明がつかないのではないと思われる。

(16) a. Given the simplicity of the criteria for besting an opponent—forcing him **down** or **out**—it might seem that a bad call would be out of the question. (W. Long, *Sumo*)

b. If I'd forced him **into** conversation earlier, ... (Robert Olen Butler "The Trip Back")

c. My husband and I were forced **apart**. (市川 (編) 1995)

d. The third crawling man forced himself **erect**. (Brown: K 21 0930)

force というのは, 肉体的あるいは精神的に力を行使するというだけで, それ自体は対象物の物理的移動も状態変化も含意しない。ところが, この動詞

が後に従えることができるのは、(16 a, b) のような場所的な前置詞ないし不変変化詞が普通である。(16 c) の *apart* も状態ではなく位置関係を意味しているし、(16 d) の *erect* も ‘in an upright position’ という位置である。これに対して、*force* が状態の結果述語を伴った (17) のような表現は見られない。

(17) a. **They forced the building to bits.*

b. **They forced their enemies dead.*

したがって、*force* が場所的な補語を要求するというのは、この動詞に特有の性質であり、それは単に現実世界の知識や認知作用だけでは処理できない語彙的な問題であると言える。

さて、ここで注目したいのは、*push*, *throw*, *fling* など、位置的な補語しか取らない働きかけ動詞でも、*open* という形容詞なら取ることができるという点である。

(18) a. He **pushed** the door open and looked in. (John Gardner “Redemption”)

b. and [he] **pulled** open a wide, shallow drawer. (John Gardner “Redemption”)

c. I’ll unlatch it [the door], unlock it, and **throw** it open. (Mikhail Iossel “Bologoye”)

d. She **flung** open the french windows and ran over the sodden grass. (LOB: L 21 207)

e. Then came a sudden crash as the front door was **thrust** violently open. (LOB: N 18 211)

f. When the mob had found her doors locked they had soon given up trying to **force** them open. (COBUILD Word Bank)

他に、*yank open*, *shove open*, *jerk open* などがある。(18 f) で *force* の例を示したが、OED を始め一般の辞書では *force* 自体に「ドア、金庫などを力づくでこじ開ける」という意味を設定している。しかしそれでは、なぜこのような意味が特別に存在するのかが不明である。むしろ *force... open* というの

が基本で、辞書が載せている「開ける」という意味は *open* を省略することから派生的に生じると考えるほうが妥当ではないだろうか。それは、ちょうど *bang* や *slam* が *shut* という結果述語を伴わなくても「閉める」の意味に理解されるのと同じである。

(19) a. The burglar forced the door (*open*). () 内は省略可。

b. The burglar {banged/slammed} the door (*shut*).

さて、もし上例 (18) に見られる *open* を単純に「開いている状態」と解釈すると、ここに使われた働きかけ動詞が通常は場所的な補語しか取らないことと矛盾をきたし、一義的経路の制約にも抵触することになる。

(20) a. He pushed it {in/out/down/up}.

b. He pushed it {open/shut}.

c. He pushed the door to. (ドアを押して閉めた)

この矛盾を解消するためには、(20 b) の *open/shut* を状態ではなく、(20 a) の *in* や *out* と平行的に「位置」を表すと考えることが必要になる。その点で (20 c) の表現も示唆的である。つまり、*shut* という形容詞は扉や蓋が入り口や箱のしかるべき位置（すなわち閉まった位置）にあることを表し、逆に形容詞の *open* は扉や蓋がその本来の位置にないことを表す。概念構造で表すと、概略、(21) のようになる。

(21) a. *shut* : [[DOOR] BE AT-_[Place] DESIGNATED POSITION]]

b. *open* : [[DOOR] BE NOT-AT-_[Place] DESIGNATED POSITION]]

この考え方では、*open/shut* という形容詞は、形容詞でありながら、物理的な位置を表すことになる。おそらくこの物理的な位置を原型として、そこから「開いている／閉まっている」という状態の意味が派生し、*We leave the problem open.* や *Please be open with me.* のような比喩的な意味へ拡張しているものと思われる。

辞書では副詞とされるが、*apart* や *ajar* なども *open/shut* と同様の働きを持っている。

(22) a. He pushed the sliding doors **apart**.

- b. He pushed the door **ajar**. (市川 (編) 1995)

位置関係を表すと思われる形容詞はほかにもある。

- (23) a. Con pushed himself **free** and dashed forward. (LOB : P 01 111)

- b. The ship got **free of** the harbor. (船は港を離れた)

(23 a) の **free** は「自由な」ではなく「ある場所から離れている」という位置関係を意味し、(23 b) のように **of** という起点を伴うこともある。次の **clear** も同じように扱うことができる。

- (24) a. The impact threw her **clear**. (ある場所から離れたところへ投げ飛ばされた)

- b. The lock was massive but ancient and simple. There was no key in it. I probed with the wire, but the wire bent. I **pulled it clear**, tried again, but again it bent. (COBUILD Bank of English)

- c. I steer **clear of** them [the snakes] anyhow. (Millicent Dillon “Oil and Water”)

この **clear** も、(24 c) のように **clear of** という形で使われ、位置関係を表している。

本節では、**push**, **fling**, **throw**, **force** などの働きかけ動詞とともに用いられる **open/shut** が扉の位置を表すことを述べた。次節では、考察の範囲を他の構文にも拡大し、**open/shut** の位置的意味が妥当であることを裏付けていく。

3. 他の構文からの裏付け

open/shut が物理的な位置を意味するという分析は、働きかけ以外の動詞との共起関係からも補強できる。働きかけ以外で、結果述語の **open/shut** を取る動詞を整理すると、2つのグループに大別される。1つは **swing**, **swivel**, **slide**, **spring** のような移動動詞である。

- (25) a. His mother **swung** the door open. (M. Spark, *Voices at Play*)

b. The drawbridge started to **swivel** shut. (S. Spielberg, *Close Encounters of the Third Kind*)

c. At that moment, the helicopter door started **sliding** shut behind him. (*Close Encounters*)

他に, spring open, drop open, fall open, fly open などがある。これらの移動動詞は扉が動いていく様態を描写している。先に (7) で述べたように, 一般に移動動詞は *He arrived breathless. のような状態の結果述語を取ることはできないから, もし (25) の open/shut が単なる状態なら, 結果構文として成り立たないはずである。他方, 移動動詞は場所的な補語を伴うのが普通であるから, open/shut は場所表現と平行していることになる。

(26) a. The door swings inward. / The door swung open.

b. He slid the drawer out. / He slid the drawer open.

もう 1 つのグループは bang, creak, snap のようなオノマトペ動詞である。

(27) a. The house door **banged** open. (Brown: N 12 0550 1)

b. One of the onlookers tries to **creak** open the stiff iron gate.
(M. Spark, *The Driver's Seat*)

c. Many of the orchids were carnivorous and if something or someone touched them, they **snapped** shut like traps. (M. Ende, *The Neverending Story*)

他に, burst open, slam shut, flick open, pop open, crack open などがある。この種の雑音発散動詞もしばしば移動を表すのに用いられる (Levin 1993: 105-106, 影山・由本 1997)。

(28) The first police cruiser **roared** through the gates in hot pursuit.
The second cruiser **howled** past, sirens and roof lights at full tilt.
(*Close Encounters*)

このような移動動詞との平行性も open, shut が物理的位置を表すことを物語っている。その上, Levin & Rappaport Hovav (1995: 192) が指摘するように, この種の雑音発散動詞は状態を表す結果述語とは共起しない。

(29) a. *The door banged to pieces. (ドアがボタンと閉まって、バラバラになった)

b. *The curtains creaked threadbare. (幕がキシキシと閉まって、ボロボロになった)

したがって、Levin & Rappaport Hovav も指摘しているように、雑音発散動詞の補語として用いられる open/shut は状態ではなく、位置でなければならないことになる。

以上では、open/shut と共起する動詞について述べたが、次に、形容詞の open 自体が取る修飾語に眼を向けてみよう。

(30) He pushed the door **open into** the moon-striped kitchen. (J. Updike “A Sandstone Farmhouse”)

前置詞の into～は明らかに場所を表しているから、open 自体も場所的な意味であることが窺える。このように着点を示す前置詞句を伴う例は、動詞の open にしばしば見られる。

(31) a. She opens the pinewood door **into** the porter’s office. (Lan Samantha Chang “Salem”)

b. The structure’s interior hierarchies of space are immediately impressive. . . . French doors open **onto** terraces. (COBUILD Bank of English)

into/onto が動詞の open と共に用いられるのは、これらが動きの結果としての着点を表すからであり、たとえば (31 a) は、ドアが「閉じられた位置」から「部屋の中へ」動いていくことを意味している（動くというのは、もちろん、蝶番を軸として動く (The door swings on hinges.) ということ）。そのため、この用法の into/onto は、(31 b) で French doors とあるように外開きの窓や扉に適用し、左右に移動する引き戸や上下に動かす窓では不適当である。

この意味を基本として、窓やドアを含む部屋全体が open into～と表現されることもある。

(32) a. a well-run, colonial-style hotel where polished rooms with massive bathrooms open onto a cool verandah (COBUILD Bank of English)

b. The kitchen was designed to open into a bright conservatory.
(COBUILD Bank of English)

open/shut がドアや蓋だけでなく、それを含む部屋や箱全体についても使えるという現象を、影山 (1980: 112) では「語彙的編入」という考え方で説明した。平たく言うと、(33 a', b') では、動詞 open, close の中に 'door', 'lids' に当たる概念が取り込まれているということである。

(33) a. She opened the refrigerator door.

a'. She opened the refrigerator.

b. She closed her eyelids.

b'. She closed her eyes.

この現象は、全体で一部を表すメトニミーとして分析するのが普通だと思われるが、しかし先に述べた into/onto という着点表現に着目するなら、部屋全体が主語ないし目的語になる場合でも、位置を変えるのは、やはりドアであると考えなければ理屈に合わない。したがって (32) のような例でも、概念構造においては、ドアの位置変化として表示しておくことが必要である。具体的に示すと、(34) のような構造が仮定できる。

(34) ... BECOME [[DOOR-of-[] BE [NOT-AT-[DESIGNATED POSITION] & [AT-ON-[verandah]]]]]

DOOR は、the door のように明示してもよいが、意味的に含意するだけで明示しなくてもよい (つまり語彙的に編入される)。後者の場合、DOOR-of-[] の空欄のところに入る the room などが主語ないし目的語として表出される。いずれにしても、あくまで DOOR が所定の位置から 'verandah' の方へ位置を変えるということである。(34) の [NOT-AT...] & [AT-...] という部分は、通常の移動動詞なら from ... to ... という前置詞で表される起点と着点に対応する (影山・由本 1997)。なお、This facility is open to all

students. や His new book is open to criticism. のような比喩的な意味の場合には、(34) とは異なる概念構造に変わっているのではないかと推測できる。

このように、open/shut は、ドアなどが本来の位置からそうでない位置へ移ることを表している。その移動の幅は、wide や a few inches などの副詞で示すことができる。

- (35) a. ... and then the door opened **wide**. (Richard Ford “Rock Springs”)
 b. Sean watches the door open **a few inches** until the chain pulls it short. (Frank Conroy “Midair”)
 c. Alex went to the door. He opened it **a crack**. (Brown: K 27 1040) (少しの隙間)

このような距離表現からも、open が⁵位置を意味することが確認される。

参考文献

- Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
 Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.
 影山太郎. 1980. 『日英比較 語彙の構造』松柏社.
 影山太郎. 1996. 『動詞意味論——言語と認知の接点——』くろしお出版.
 影山太郎・由本陽子. 1997. 『語形成と概念構造』研究社出版.
 Levin, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations*. University of Chicago Press.
 Levin, Beth, and Malka Rappaport Hovav. 1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. MIT Press.
 Tenny, Carol. 1994. *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*. Kluwer.

市販コーパス・辞書

- The Brown Corpus and the Lancaster-Oslo-Bergen Corpus* on the ICAME CD-ROM. 1991. Norwegian Computing Centre for the Humanities, Bergen, Norway.

Collins COBUILD on CD-ROM (Word Bank). 1995. Harper Collins.

Collins COBUILD Bank of English. (internet: <http://titania.cobuild.collins.co.uk>)

市川繁治郎 (編). 1995. 『新編 英和活用大辞典』研究社出版.

小西友七 (編). 1989. 『英語基本形容詞・副詞辞典』研究社出版.

——文学部教授——